

Title	物語の成長：宇津保物語の場合
Sub Title	The growth of "monogatari" : with special reference to The Utsubo Tale
Author	池田, 彌三郎(Ikeda, Yasaburo)
Publisher	慶應義塾大学文学部藝文学会
Publication year	1953
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.2, (1953. 2) ,p.1- 30
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00020001-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00020001-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 物語の成長

——宇津保物語の場合——

池田彌三郎

## 一、偽作説の検討

- 二、先行する中篇小説      その一
- 三、先行する中篇小説      その二
- 四、先行する中篇小説      その三
- 五、宇津保物語の改作      その一
- 六、宇津保物語の改作      その二
- 七、餘論

## 一、偽作説の検討

宇津保物語の名は、源氏物語に「うつほの俊蔭」「うつほの藤原の君」など、見え、枕草子に「物語は佳吉、うつほの類」など、ある事から、誰も此作品の成立年代を疑はなかつたし、竹取物語と源氏物語との間に、此物語をおいてみると、傳奇的な物語から人情小説へと發展展開して行くと言ふ、西歐の文學史からの常識に、びたりとあてはまる様な形をとる爲に、宇津保物語が源氏に先立つて成立

した事は、自明の事實として、誰もいまだに疑ひをはさんでゐない。従つて、世間一般の宇津保に關する論議は、其成立論も構成論も、其點への反省なしに出發してゐるものがほとんどすべてである様である。

宇津保物語の成立について、從來の諸説を根本から相手にしないで、それが鎌倉以後のものであらうと言ふ事を説いたのは、折口信夫先生である。尤、安齋隨筆には、「貞信公の右帯」を問題にして、宇津保を疑つてゐて、これが、偽作説のさきがけではあるが、勿論まだ徹底した議論ではなかつた。

折口先生の宇津保を疑つた説は、御自身では書いてをられない。此説に暗示をうけた、松下大三郎氏が「宇津保物語は鎌倉以後の偽作か」と言ふ、注目すべき論文を、國學院雜誌に發表された時、その中に、先生の説を書きとめてをられるのが、世間の目に觸れた、唯一の、先生の説である。折口先生の説を尊重して、書きとめられた松下氏には感謝しなければならぬが、何と言つても聞き書きなので、もう少し、きめを細かく、先生の説を紹介し直す必要がある。

先生の、宇津保物語偽作説は、現在の宇津保が、まる／＼の偽作だと言つてゐるのではない。改作、書きつぎの筆が加へられたものだと言ふ説であつて、その改作、書きつぎの筆は、鎌倉以後に到つて大きく加へられたと言はれるのである。その根據は、

(1) 宇津保物語の言語、語法に、鎌倉以後の言語語法があること。

(2) まゝ子いぢめの話が、宇津保の中に出て來ること。

先生は、いきなりまゝ子いぢめの話證據として持ち出して來たのではなく、第一は言語である。國語の歴史上、明らかに後代のものが出てゐる事は、辯護の餘地がなからう。そしてその次に、まゝ子いぢめの話がある事を、傍證として言はれたのであつて、その輕重順序に誤解があつてはならない。

又、まゝ子いぢめと言つても、先生は多分、その物語にいくつかの段階のあることを考へた上で言つてをられると言ふ事も注意せねばならぬ。そして、先生のお考へでは、宇津保の『忠こそ』の卷に書かれてゐるまゝ子いぢめは、まゝ子いぢめの話としてはかなり進化した段階にあるものなのだ。その上、世間に行はれた事實と、物語に書かれたものとの間には、時間的のずれがある。現實の世間に

行はれた事實が、昔の物語に、直にそのまゝ、うつされると言ふ事はない。世間の事實や個人の經驗が、直にうつされる様になつたのは、自然主義文學以後のことだ。現實をそのまま直に書くと言ふ態度は、昔の物語の時代には、まだ生れてゐなかつた事を、考へなければならぬ。だから、先生の言はれる事を延長して行くと、物語にないからと言つて、それは勿論現實にないと言ふ事ではない。平安朝の家庭では、まゝ子いぢめの起りうる要素は揃つてゐる。だから、現實には、まゝ子いぢめもあつたであらう。たゞそれが物語に書かれる爲には、さう言ふ現實が繰り返され、現實そのものに一つの型が出来、さうなつて後に、はじめて書かれるのだ。だから、『忠こそ』の巻に書かれてゐるまゝ子いぢめが、まゝ子いぢめの話自身としても、相當に進んでゐるものである以上は、『忠こそ』の現在の巻が出来上つた時は、ずつと後にまで、引下げてみなくてはならない譯である。——松下氏の論文に簡単に引用されてゐる先生の説は、少くとも、これだけの含みをもつて言はれてゐるものである事を、考へておかなければならぬ。

折口先生の、宇津保改作説の根據二個條に、松下氏が更に加へられたのが、宇津保の人名の問題である。

松下氏の研究によると、宇津保の主要人物の或者は、平安朝のごく末から鎌倉へかけての實在人物、歴史上の人物の名そのまゝであつて、而も、境遇までが、歴史上の事實と物語の内容と似てゐる。かう言ふ事を、松下氏は指摘せられたのである。

おそらく此論文を以つて、宇津保が、少くともその形のまゝではない事は、明らかになつたのであつて、もはや誰も、現在の宇津保物語が、鎌倉以後の成立であると言ふ事に、異論をさしはさむ事は出来ないであらう。がもし更に此三個條に加ふるべきものを求めるならば、

- (1) 宇津保物語自身の中にある、錯亂矛盾は著しく、それは、改作書きつぎの途中で、力及ばずに投げ出した跡が、歴然としてゐること。——此事は、本稿の中心課題として後述する。
- (2) 宇津保の作者（最後の改作者と言ふべき人）の、宮廷及び宮廷生活に對する理會や感情は、源氏などから考へられる、平安朝風のものとは、だいぶ變つてゐて、後代風であること。
- (3) 色好みに對する考へ方、感じ方も變つて來てゐる事。

(4)、上流貴族が、固有名詞を以つて、一貫してよばれてゐる事。

宇津保の主人公の一人、源雅頼の北の方の一人は、嵯峨院帝の女一の宮であつて、此腹に出来た子供達、つまり宮腹の子達の中、女君たちは、宮と呼ばれてゐる。女主人公の一人である、あて宮を初め、今宮、袖宮、けす宮がそれである。更に、又別の主人公の一人、藤原仲忠の北の方、朱雀院帝の女一の宮の腹に出来た女君が、やはり大宮と呼ばれてゐる。此は、源氏物語などによる知識から言ふと、頗る異様であつて、不正確な氣がする。源氏では、何宮とよばれ、何君と呼ばれる間にはつきりした區別があつて混亂してゐない。宇津保のあて宮に、ほゞ等しい系譜上の位置を占める者に、光源氏の北の方、葵の上がある。父は左大臣で、母は桐壺帝の妹宮であるが、その腹に出来た姫君だから、宇津保流には「宮」と言ふべきだが、源氏では「君」と呼ばれてゐて、宮と呼ばれた例はない。源氏では、父宮が帝位におつきにならねないで、親王で終られた場合、その御子はすべて君である。親王（及び内親王）の御子、即、孫王と言ふべき位置の方々々は、源氏には澤山登場するが、すべて君である。末摘花の姫君（常陸宮の御子）については、『蓬生』の卷に、やや不安定な呼び方——建て物を指して宮と言つてゐるのか、その住人である姫を指して宮と言つてゐるのか——があるが、その外には、疑問を残す様な點がない。孫王を宮と呼んだ例が平安朝にあつたかなかつたかと言ふ事になると、それはもつと廣い調査が必要であつて、將來の課題であるが、私は今の所これを、作者と宮廷生活との繋りの疎隔に歸したい。源氏の作者と宇津保の作者の世界とは、宮廷生活に對するつながりが違ふのであつて、宇津保は其點、後代的であるとみたい。

此にまう一つ加へて考へたい事は、官位について持つてゐる作者の感じ方にも、自らに後代風ものが現れてゐる。譬へば先にもあげた藤原仲忠であるが、仲忠は出仕の後、まづ侍從に任官する。彼は、當代隨一と稱せられる人物であるが、仲忠と優劣を争ふ人物であつて嵯峨院帝の御子である、源涼も、出仕してまづ侍從に任せられる。又此二人に比較せられる人物に、源仲頼があるが、此は少將である。所が源氏物語では、光源氏の長男夕霧は、特別な父のはからひで、低い官である侍從から出發する。夕霧は自分が侍從であることを恥ぢたり悲しんだりして、極度に卑下したりしてゐるし、伯父で、夕霧の戀人の父である内大臣などは、輕蔑のことを洩らししてゐる。まして、少將位の官の者が、少くとも物語の主流になつては現れて來ない。此等の事も、宮廷生活の圈内からは外にたつてゐ

る作者の感じ方、考へ方であらう。平安朝の匂ひの濃い物語の世界では、當代一流の人物とは、まづ官位も、もつと高いのである。

色好みの問題になると、宮廷及び上流貴族の生活をゑがきながら、宇津保は既に、色好みが理想的人物の、缺くべからざる美德として考へられてゐた時代の作品ではない事が明らかである。少くとも、當代一流の人物だどくり返し言ひ立てゝゐる人物が、色好みを忘れてをつて、作者はあわてゝ、とつてつけた様に説明を添へてゐる。色好みは物語の大事な主題となつてゐた時代が過ぎたと言ふ感が深い。

かの朝臣（仲忠）まかり歩きもせで、この頃は（北の方の傍にのみ）侍る。（まかり歩くと言ふ語は色好み語彙で、かくし妻のもとを、あちこち訪れて歩く事）。

なほ女一の宮（仲忠北の方）こそいと心憎けれ。（仲忠は）そこと心人に知らせざりつれども、もの言ひ觸れぬなりしものを、あからめもせさせで持ち給へるよ。

中納言（仲忠）も昔はそこ（仲忠の父の兼雅）の御有様にも劣らず聞えしかど、この宮（北の方）の名だたり給へる人なれば、いとまめになられたるにこそ。

とこんな風に書かれてはゐるが、仲忠のまかり歩きも、もの言ひふれぬなかりし生活などは、仲忠の身の上については、全然書かれてはゐらず、たゞあて宮に懸想し、その入内後に、女一の宮をいたゞいて、此を大事にしてゐる生活しか書かれてゐない。當代一流と稱せられる人物と言つても、その條件として、色好みと言ふ事は書かれなくなつてゐるし、又書かれなくともよい時代となり、讀者となつてゐる。

宇津保と源氏との違ひで、讀んですぐに氣のつくことは、源氏は、官名を以つて人物が登場してゐるのが原則であるが、宇津保は、登場する上流の貴族達が、れつきとした固有名詞をもつてゐる點で、首尾一貫してゐて、讀者をまよはせない。光源氏と言ふ名は、勿論、源光と言ふのではなく、光り輝く皇族様と言ふあだ名である。女の側の、末摘花と言ひ夕顔と言ひ、さう言ふ名は、作者も符牒的に、時に使つてゐるが、むしろ讀者の便宜や慣用から出た名で、何の誰と言ふ名ではない。源氏では、固有名詞をもつて呼ばれてゐる

のは、良清、惟光等數へる程で、それも上流の公達ではない。此點宇津保ははつきりと違つてゐるので、此は、靈異記から今昔物語に及ぶ説話文學、殊に軍記物語の盛行を、傍に考へるべきだらう。少くとも現在の宇津保は、軍記物をとほつた後の作品である様に思はれる。

## 二、先行する中篇小説 その一

現在の宇津保が改作、書き繼ぎをかさねたものとする、そのもとは、どんな形のものであつたらうか。此はどこまでも想像説にすぎないが、併、宇津保の様に不備だらけ、缺點だらけの失敗作は、却つてさうした考察には便利である。此が源氏物語の様に、一應整つた形にまとまつてゐると、成立への疑ひもおこり憎いのであるが、其點では、宇津保の研究が、源氏研究へ、大きい寄與をする事になるであらう。源氏の場合、今日でもなほ、一人の作者によつて、首尾一貫して書き續けられたと言ふ様な、素朴な考へに固執してゐる人もあるが、まさかに宇津保の讀者は、それが一貫して一人の作者の一つの意圖のもとに書き上げられたと言ふ様な、呑氣な考へを持つ譯には行かないだらう。

宇津保には、此を構成する二つのふろつとがあつて、これが互にとけあひ切つてはゐない。片方のふろつとの主人公は、片方では脇役以下であり、他の主人公もさうである。

藤原仲忠と言ふ、變化の者と言はれる程の、不思議な成育を遂げ、神秘的琴と琴の彈奏法とを傳へた、當代一流の人物に對して、誕生の神秘を取り去つたかぐや姫とも言ふべき、あて宮と言ふ人物が配されるのだから、當然此二人が結ばれる事が豫想される。併、あて宮は、かぐや姫が昇天した様に、宮中に入つてしまふ。而も、物語はその後にも展開を續けて行くが、それは、仲忠の悲痛な生活でもなく、あて宮の後悔の悲劇でもない。作者は計畫的に、二人を結合させなかつたのではない。つまり、仲忠を中心とした物語の側からみると、あて宮は脇役以下であり、あて宮を中心とした物語の側からみれば、仲忠は結局澤山の懸想人の中の、單なる一人にすぎない。

い位置しか興へられてゐない。勿論、作者はとつてつけた様に、あて宮に對する仲忠の位置を、引上げようとしてゐるが、その言ひ方がいかにも書き添へ、書き加へと言つたあとが歴然としてゐて、——譬へば、

九の君(あて宮)と聞ゆれど、仲忠には御眼とゞめ給ふ。

あて宮御覽じて、(あて宮に想ひをかけてゐる數多の)人々の中に、(仲忠をば)こともなし(ほめ詞)と思す人なれば……

こんな、とつてつけた様な斷り書きが、ひよい／＼と這入つてゐて、而も全體としては少しも特別扱ひをされてゐないのだから、これは、改作者の融合計畫による書き加へと言つてよい。あて宮にしても、作者は、仲忠の北の方となつた女一の宮を、ひよつと羨しながらせたりしてゐる所が、これもとつてつけた様に出てくる。改作者は、仲忠を中心とした物語——仲忠ものがたりと言ふべき中篇小説——と、あて宮を中心とした物語——あて宮ものがたりと言ふべき中篇小説——との融合をはかつたのだが、完成しないまゝに無責任に投げ出して了つたのである。

こんな融合しない二つのぶろつとがあるのだから、宇津保が、今に、卷々の順序さへきまつてゐないのも、しかたのない事だ。たとへば、卷頭にどの卷を据ゑるかと言つた事にしても、仲忠を主流とみれば、仲忠の出生と系譜とを記してゐる『藤原の君』の卷が首卷にすはるべきだが、あて宮の側に目をとめれば、あて宮の出生と系譜とを記してゐる『藤原の君』の卷が首卷にすはるべきであらう。源氏は、今日の源氏物語は、光源氏の一代記であるから、疑ひもなく、『桐壺』の卷が第一卷におかれてゐるが、もし、女源氏の物語として發展してゐれば、『若紫』の卷が當然首卷にすはるべきで、さうなれば、夕顔も末摘花も、横の並びと言つた風な、簡単な處置ではさまらなくなつてしまふ。現に宇津保では『忠こそ』の卷などは、實にすはりの悪い卷である。(忠こそについては後述する)。

源氏物語にも、少くとも三つは、書き出しらしい卷がある。『桐壺』『帚木』『若紫』がそれである。考へ様によつては、光源氏のものがありが、紫のものがたりとでも言ふべきものを抱合して、光源氏の長篇小説としてまとまつた時に、『桐壺』の卷があつたら添へられたとさへ見られるのである。所が、此點でも、宇津保物語は、作者の力量の不足か情熱の缺如か、長篇化の筆も甚だつたない。『藤原の君』も『俊蔭』も、つきはぎがあらはで、而も、長篇の首卷としては、不必要と思はれる程にくだ／＼しい部分が多い。



此二つの首巻は、お互に全く關係がない。——全くと言ふのは多少誇張があり、うそになるが、さう言つてもいゝ理由がある。

『藤原の君』の巻の人物は、『俊蔭』の巻に出ては来るが、その出方に特徴がある。そして『俊蔭』の巻の人物は、『藤原の君』の巻には全く出て来ない。たゞ一人、仲忠の父にあたる、藤原兼雅だけは兩方に出て来るが、それが同一人物であることは、讀者が自分々々の知識でまとめるだけの事で、作者はちつとも同一人として書いてはゐない。名さへかへれば別人であつて、兩方の巻であたへられる人物の映像はお互に他に投影してゐない。此は作の失敗など、言ふ程度ではなく、別のものを無理やりにくつつけ結びつけ、而もその手際が甚だ下手だつた、と言ふ事になりさうである。

『藤原の君』は、

第一段 源雅頼及び其一門の系圖

第二段 あて宮に挑む懸想人の物語

と、かう二つにわけてみられる。

此巻の第一の不思議は、巻の名である。内容とはびたりと合つてゐない。尤、巻の名や物語の名は偶然で、でたらめなものだ、と言つてしまへばそれまでだが、此巻の中心は、質量共に第二段にあるのに、源雅頼の幼名を以つて巻名としてゐる事に、まづ奇異の感を抱かせられる。

藤原の君と言ふのは、源氏雅頼の童名であつて、その事は雅頼自身の口で言つてゐる。併、一世の源氏を、何故に幼名を藤原を以つて呼んだのか。後に雅頼は、一族を引伴れて、春日神社に參詣する『梅の花笠』の巻。雅頼は母方が藤原氏だから春日詣をすると言ふ風に説明がしてあるが、母御息所が藤原氏だから藤原の君と呼ばれたと言ふ説明（さう明らかには書いてないが、さう説明しようとしてゐる）と共に、何か納得出来ないものがある。殊に「藤原の君」と言ふ名は源氏物語に見え、源雅頼とは、松下氏によれば、實在人物の名だと言ふのだから、藤原の君が源雅頼と同一人になつてゐる事に根本的疑ひが生ずる。さう思つてみると、此巻の筆も多少曖昧であつて、

昔、藤原の君と聞ゆる一世の源氏おはしましけり

と言ふ書き出しで、此藤原の君と言はれる源氏の君が、元服して雅頼となつた事などは書いてない。いきなり、

源氏雅頼御土器賜るとて

と、それこそ突然にかう書いてある。前の藤原の君と言ふ幼名の者が、一人前に成人して雅頼となつたのだと言ふ事は、讀者が結びつけて考へるだけである。

此卷自身から言へば、第一段は、あて宮紹介の爲に存在理由があるにすぎない。併、あて宮の紹介の爲にあるとすれば、むしろ不成功であつて、父雅頼に關する記述が不必要に詳しい。此卷だけの雅頼は、あて宮の父としての位置にゐるだけで、何の活動もしないで、従つて第一段の記述は、此卷の本筋に何等かゝはる事がない。あて宮の事を書く爲だけなら、父の事にこんなに筆を費す必要はない。こゝに、此卷における二つの部分の間に横たはる溝渠を感じる。即、問題は、此物語において、抑々、雅頼の存在が先か、あて宮の存在が先かと言ふ、極めて重要な問題となるのである。

第二段は、あて宮に挑む懸想人の物語と言へば、梗概を述べるまでもなく、一言でつきてしまふ。たゞ、歌を中心にした單純なものと、獨立してゐるえびそおどのいくつかがある。此は作者さへ興にのれば、それこそ無數に短篇物語——私の言ひ方では中篇小説——が挿入されて行く。竹取物語の五人の懸想人は十人に増えてもいゝし、源氏の雨夜の月旦で、話題になる女の數はもつと増えても、少しもさし支へないのと同斷である。時間的統一も一貫した連繋もなく、構成は頗る弱くて、部分的抜きさしは自由である。

登場する懸想人は十一人、源實忠、藤原兼雅、平正明、兵部卿の宮、源仲澄、上野宮、三春高基、彈正宮、良岑行政、滋野眞菅、それから春宮である。此等の人物は、上野宮の様に全く獨立してゐる者もをり、春宮の様に成功する懸想人もあるが、要するに、長篇宇津保物語からみれば、此卷に登場するあて宮の懸想人は、殆、主流の人物ではない。恰も源氏物語雨夜の月旦の話題にのぼる女性達が、殆、杳として消息を絶つ如く、此等の人々についても、作者ははなはだ無責任である。勿論、實忠、仲澄、兼雅は或意味で大事だが、その兼雅にした所で、後には主人公級の人物になるのだが、そんな必然性は、此卷の兼雅にはけぶりもない。單なる一人の色好みであ

つて、既に仲忠と言ふ肝腎な人物の父である事など、全く書いてない。月且の常夏の女が、後に夕顔の女となり、撫子が玉臺となつて大きい發展をして行くのよりも、もつと一段と偶然性に富んでゐて、此卷の兼雅は、ごく平凡な、あて宮をめぐる一懸想人にすぎない。宇津保の藤原の君の女こそ、いと重りかにはかゝしき人にて、過ちなかめれど、すくよかに言ひ出でたる言も、女しき所なかめるぞ一様なめる（源氏『螢』の卷）。

源氏の螢の卷の筆者の見た此宇津保が、今日の藤原の君の卷でもなく宇津保物語でもない事は、想像してよいと思ふが、此がおそらくあて宮ものがたりの原形に近いもので、おそらくそれには、雅頼も兼雅もゐなかつただらうし、あて宮と言ふ名もなかつたであらう。そして此あて宮ものがたりが長篇へと書きつがれて行き、やがて一門の物語となつて行くにつれて、現在の第一段が書き添へられて行つたのであらう。此第一段は、發展したあて宮ものがたりにとつては、必要な記述である。

而も、こゝで問題の雅頼と兼雅こそ、先の松下氏の指摘によれば、史上の人物であつて、史上の事實をかなり物語の境遇の上に反映させてゐる人物であると言はれてゐる事は注意を要する。中篇小説が長篇小説に書き續がれて行く時に、史上の人物の境遇をもとりこんで、物語が成長して行つたと考へられるであらう。

### 三、先行する中篇小説 その二

『藤原の君』の卷の考へは、直に『俊蔭』の卷にもあてはまる。現在の宇津保からすれば、此卷は、仲忠ものがたりを長篇小説化するべき位置に据ゑられてゐる。そして、たしかにその意圖のもとに、改作が行はれたらしい事が想像される。

此卷の第一の作者が、仲忠を主人公と考へて、その出生を説く爲に、俊蔭の事から筆をおこしたとするのは、かなり疑問がもたれる。つまり此卷でも、俊蔭が先か仲忠が先か、殊に仲忠の場合、兼雅が先か仲忠が先かと言ふ事は、第一の問題となる。俊蔭の名は、勿論名だけであるが、源氏物語に出て来る。仲忠の名は枕草子その他に出て来る。さうして兼雅の名は、鎌倉初期の史上の人物に、その名

を見出す。

此卷は次の四つの部分に分けられる。

第一段 俊蔭漂流譚

第二段 俊蔭女と兼雅（當時若小君）との交渉

第三段 仲忠流離譚

第四段 出仕後の仲忠

宇津保物語は、『俊蔭』を第一巻に据ゑるのが今日までの常識であり、又此卷は他に比べて、俊蔭の漂流譚と、仲忠母子のうつばに於ける生活に異色があるので、それが此卷の存在をきは立たせ、江戸期の刊本には、此卷だけ獨立して刊行したものがあつた。殊に源氏に「宇津保の俊蔭」とある事、更に此物語の名が、此卷の内容から出てゐるらしく思はれた事など、一層此卷の重要性を増した様である。併、さう言ふ豫備知識の埋積を遺れて、此卷自身を考察してみよう。

此卷の第四段は、『藤原の君』の知識がなくては譯らない。俊蔭・俊蔭女・仲忠と、祖父・母・子と、三代に互つて進んで來た筆は、此段に這入ると、舞臺が急に擴がり、今までの中心は失はれ、雅頼の側から此物語の世界が描かれ初める。つまり雅頼を中心とした、今までとは別系統の世界が、卒然と展開をし初める。

仲忠が<sup>婿</sup>以外の「ことあそび」を教はる、此も當代屈指の人物、仲頼行政の二人が突然出て來る。左大將と言ふ名で、雅頼もいきなり出て來る。雅頼の所の、當時の貴公子が挑みかけてゐる「らうたしと思ふ女の童」に就いて、何の豫備知識もないのに、仲忠は、既によく知つてゐる。これ等の事は『藤原の君』や『嵯峨院』の卷で與へられる知識であつて、此段は、それ等の卷の書かれた後でなければ、書かれる筈がない。つまり、此部分分は、宇津保が現在の形に整へられる時の添加に違ひない。そして、前に多少誇張して言つた様に、此部分を切放せば、『俊蔭』は『藤原の君』とは全く關係がなくなつてしまふ。

此兩卷に、自由に出入してゐる人物は仲忠の父である兼雅であるが、此も、名は等しいが、此兩卷に於ける限りまるで別人であつて、

『藤原の君』の兼雅は、あて宮に挑む色好み的人物、『俊蔭』の兼雅は、あて宮との事はけぶりもない、たゞ仲忠の父である。併、此卷で兼雅が、若小君として登場する第二段は、勿論つき目は現在では、どことは言へないが、第一段第三段とは、割合にはつきりと違つてゐる。内容の點からも形式の點からもさうである。殊に第一段は際立つてゐる。

朝に見て夕のおそなはる程だに、紅の涙を落すに、遙かなる様に、相見むことの難き道に出で立つ。父母俊蔭悲しび思ひやるべし。俊蔭定めて知りつ。我身は此山に滅しつ、と思ふものから、いかしき心をなして阿修羅の中に交りぬ。

我等昔の犯しの深きによりて、悪しき身をうけたり。しかあれば、忍辱の心を思ふ輩にあらず。しかはあれど、日本の國に忍辱の父母ありと申すによりて、四十人の子供の悲しく、千人の眷屬の悲しきによりて、汝が命をゆるしをはんぬ。

まるで、文法を超越した文章だ。更に、筆が簡單にはしよりすぎてゐるかと思ふと、今度は又ばか丁寧に、たゞ名詞をおさかへてゐるだけの繰り返しを續けてゐて、却つて、さう言ふ所には省略がなく、右の引用でも一部分訣る様に、きつくつな漢語及び漢語式の語が實に多い。

俊蔭天人の宣ふに従ひて、花園より西をさして行けば、大いなる川あり。其川より孔雀出で来て其川を渡しつ。琴をば例の旋風おくる。それより西へ行けば、谷あり。其谷より龍出で来て越しつ。琴は旋風おくりつ。それより猶行けば、さかしき山七つあり。其山より仙人ありて越しつ。それより西を行けば、虎狼ひと山騷ぐ所ありき。犀出で来て其山を越しつ。それより西へ行けば……

かう言ふ文章に比べて、第二段は、我々が漠然と承認してゐる平安朝式の文章と背馳しない。其上、第一段には全くない短歌が、此部分には十六首もある。(第三段一首、第四段二首)。元來宇津保は、源氏より短いに拘らず、歌の数は却つて多い。源氏は八百首足らずで宇津保は千首に近い。而もそれが、たゞ物語と言ふものは、歌さへはいつてゐれば、形式が整ふものと言ふ傳襲觀念にとらはれてゐるのか、たゞ羅列式な記録にとゞまる程度のものである。それに比べて、此卷の第二段の歌は割合に救はれてゐる。つまり第二段は、俊蔭女と若小君(當時の太政大臣の思ひ子)との戀の交渉を主題とした、歌物語となつてゐるからである。上流の貴族の子弟が、蓬生の宿に、すぐれた女性を發見すると言ふ、當時の色好みの生活の、一つの理想的な冒險譚として、獨立してゐる。而も、本來してたる

べき俊蔭女が、こゝではわきに廻つて、若小君がしてとなつてゐる。つまり若小君の目によつて女を見、女の家を見てゐる。だから、第二段の作者は、どうしても第一段の作者とは違つてゐる筈であるし、又材料も違ふ。それが第一段と第三段との間に、這入りこんで来たのである。

第二段は、仲忠の爲に必要でなく、むしろ、後の兼雅、及び兼雅の北の方三條の君としての、俊蔭女の爲に必要なのだ。仲忠の出生を説く爲には、若小君との交渉は、不必要に長すぎる。さうして、かう言ふ事實は、仲忠が、俊蔭の孫としての必然性があるかどうかと言ふ、大きい疑問をおこさせる。

現在でも、第一段と第三段との間には溝があるが、第二段の介在は、ます／＼此溝を大きくし、その結びつきの偶然性を増して來るのである。

仲忠ものごと、あて宮ものごと共に、現在の宇津保物語の成立には、充分考慮に入れない譯にはいれないが、それが、最も原始に近い宇津保物語ではないかも知れない。

#### 源氏物語『繪合』の卷に、

物語のいで來初めのおやなる竹取の翁に、うつぼの俊蔭をあはせて争ふ

とある記述は、宇津保物語が源氏に先行する物語である事の證據として考へられてゐる。此文章を、

物語と言ふものゝ出て來た初めの先祖である所の、竹取物語の翁に、宇津保物語の俊蔭の繪を合せて、あらそふ

と言ふ様に解釋するのは、餘りに素朴すぎる解釋だ。我々は既に『竹取物語』以外の、竹取の翁の物語を、澤山に知つてゐるし、柳田國男先生や折口信夫先生の述作によつて、うつぼと貴種流離譚との關係を承知してゐる。俊蔭の漂流や仲忠母子のうつぼの生活が、貴種流離譚の一つの型である事を考へれば、源氏に言ふ竹取や宇津保が、直に今日のものを斥すとは言はれないし、殊に「おや」と言ふ語は、先祖と言ふよりもむしろ「母胎」と言ふ風に考へるべき語だらうから、源氏の頃に流行してゐたいろ／＼の物語の母胎として、竹取の翁に匹敵するものとして考へられてゐた、うつぼの俊蔭が、今日の宇津保物語の俊蔭だなど、疑問も持たずに考へる事は、吞

氣すぎる。

俊蔭の話と仲忠の話、つまり、『俊蔭』の第一段と第三段とは、貴種流離譚として考へてみると、明らかに仲忠の話の方が古風をとめてゐる。仲忠のうづぼでの生活は、神を育てる話、或は養はれた神の話であつて、此は貴種流離譚の重要なポイントであり、俊蔭の話の如き流離の過程は、此に比べて遙かに軽い。

俊蔭が行く時の遣唐使の船は、三艘で出帆した様に書いてあるが、

四つの船 船の舳ならべ、たひらけくはや渡り來て

とある萬葉の歌で承知してゐる様に、遣唐使の船は四艘が普通である（淳仁天皇の時は、二艘だつたらしい）が、三艘だつた事があつたかどうか。又、波斯國に流されたと言ふのだが、波斯國に就いての當時の知識が、江談抄の記載以上に明らかになつて來れば、案外俊蔭漂流譚は、もつとはつきりと其據り所が譯つて來るかも知れない。

仲忠の話が、清少納言の頃、既にうづぼの生活の珍しさ故に、評判になつてゐたらしい事は、

仲忠が童生ひ言ひおとすと、驚に時鳥は劣れると言ふ人こそいとつらうにくけれ

と、枕草子にあるので想像される。枕草子の他の所では、宇津保の仲忠と涼と、とり立てゝ論ぜられてゐるから、此うづぼの生活を送つてゐる仲忠は、宇津保物語と言はれる物語の中に書かれてゐたらしい事は、まあ疑へないが、

物語は住吉宇津保の類……（枕草子）

と言ふ段を見ると、散送した中篇小説とおぼしき物語の名を澤山あげてゐるが、それにも、住吉と對比されてゐる宇津保が、今日の如き、源氏につぐ大きさのものだつたとは思はれない。だから、仲忠の話、或は涼と一緒に出来来る仲忠の話などを内容としてゐる宇津保物語は、今日の如きものではなくて、中篇小説にすぎなかつたらうと言ふ事は、どこまでも想像説だが、誤りではなからう。

或は更に言へば、源氏に出て來る「宇津保の俊蔭」「宇津保の藤原の君」と言ふ場合の宇津保は、枕草子の宇津保とは、違つたものであつたかも知れない。物語を傳誦し、貴人に語り聞かせて、其魂の成育をはかるのを職掌とした、前代の女達の後である平安朝の盛

時の女房達は、或は家々に傳はる澤山の物語を管理してゐたかも知れないからである。

或時期に、此源氏の作者の言ふうつぼと、枕草子の作者の目にしたうつぼとが、綜合される時が来た。そして源氏に言ふうつぼの俊蔭の、うつぼに關聯のある部分は、枕草子の「うつぼの仲忠」の童生ひの部分に重ねられて翻譯され、そして現在の仲忠の生活の中にとけこんでしまひ、僅かに、俊蔭と言ふ名を卷の名にのみとゞめた。そして、此二つの部分のぎやつぶに、仲忠を育てた女性の夫として、兼雅がはいりこんで来て、従つて、神を育てた女性と其神とは、世間風の母子として合理化され、兼雅は仲忠の父となつた。同時に、其女性性は、俊蔭の女と重なつてしまつた。——此は大膽な想像説である。併、宇津保の錯亂は、様々の、これに先行する中篇小説を考へて、初めて諒解される。もとより源氏物語にしても、さう言ふ成長をしたに違ひない。併、源氏の場合は、作者の力量が違ひ、情熱が違ふ。更に、書きつがれ、成長した期間が意外に短かつた。宇津保は違ふ。作者の力量も情熱も劣り、第一成長の時間が長すぎた。物語の母胎と言はれる種子が、平安朝を經過し、鎌倉に入り、漸く大きく育つて来て、松下氏の或説によれば、南北朝にまで、足をつつこんで、やつと成長がとまつたのである。

宇津保物語が、様々の中篇小説をその傘下にをさめて行つた中には、枕草子の傳へる散逸物語の中の「殿うつり」や「國ゆづり」と言ふ名の中篇小説もあつたかもしれない。勿論、枕草子に傳へるものは、その内容は譯らないが、「殿うつり」や「國ゆづり」と言ふ名は充分その内容を想像させる上に、多分、題材としても趣向としても、平安朝時代には好まれたものだらうから、同類の小説はいくつもあつたに違ひなく、それ等が宇津保に集中して行つた事は考へられよう。

「殿うつり」と言ふ語は、源氏物語の『玉鬘』の卷に出て来る。前の卷の『少女』の終りに、源氏の君の六條の邸が完成し、方々が美々しい行列をつらねて、それ／＼の町々にひきうつる。それを、此卷の始めの所で、夕顔の女房の右近が、自分の女主人の夕顔の上が生きてゐてくれたら、當然「此御殿移りの敷の中には」這入つた事だらうと歎息する所がある。これでも明らかな様に、單に、御邸の引越しと言ふだけの事でなく、自分の宏壯な邸の中に、あちこちにゐる、交渉の深い女達を迎へて来る。さう言ふ内容を特に持つた語らしい。



平安朝時代の色好みの生活の、もつとも華やかな理想は、光源氏の六條院の生活であらう。此生活こそ、當代の理想的な男の、理想的な、豪奢な生活であるが、「殿うつり」もその色好みの男の榮華の絶頂の一こまであつて、おそらくその「殿うつり」を主題とした中篇小説や繪巻物があつたらうと言ふ事は、想像にかたくない。枕草子に傳へる「殿うつり」の物語とは、おそらくその一つであらうと思はれる。

宇津保物語では、唯一人の色好みである、兼雅が、此殿うつりを行ふ。「藏開」の巻、上中下三卷の中の、大きなぶろつとの一つである。宮廷や大貴族の家庭を物語の舞臺としてゐる長篇小説でありながら、宇津保が少しも色好みらしい色好みを書いてゐないのは前に言つたが、その中で、兼雅だけは、ともかく色好みの生活をしてゐる。

宇津保の『國讓』上中下三卷は、王氏たる源雅頼の女、あて宮の皇子が皇太子となるか、他氏たる藤原兼雅の女、裂壺腹の皇子が立つかの争ひが、大きなぶろつとなつてゐる卷々で、宇津保の中でも最も物語的に躍動してゐる部分である。而も、當然重要な位置を占めてゐる人物でありながら、外の卷々には現れないで、國讓りの事件にだけ、彗星の様に現れて主役をつとめ、そのまゝ消えて行く人物がゐるたりするので、此も先行する中篇小説を思はせる。

おそらく王氏と他氏とが、それ／＼の出自を意識して、その對立感情を最も激化させるのは、どちらの女御のお生みした皇子が、儲君となるかの争ひであらうから、枕草子の頃に、既にそれを主題とした中篇小説があつた事はうなづける。だから枕草子の「國ゆづり」の内容も、大體推測する事が出来るだらう。殊に注意すべき事は、現實の世界の藤氏(他氏)全盛に對して、源氏と言ひ宇津保と言ひ、物語の世界では、王氏が榮えてゐる事だ。

#### 四、先行する中篇小説　その三

かう言ふ様に、長篇小説以前に、充分世人の興味を惹いた中篇小説があつて、それが、もとの主題をとどめたまゝで、一まはり大き

な構成の一部分にとりこまれて行くと言ふ事は、日本の物語の成長の過程には、かなり明らかかな事實であつた事が見られるのであるが、宇津保の『忠こそ』の巻、及びその宇津保全體への結びつきは、殊に明らかに、その過程を物語つてゐる様だ。

忠こそと言ふのは、時の右大臣橘千蔭と、一世の源氏たる北の方の間に出来た子であるが、母君は早くなくなつてしまふ。その頃、左大臣源忠経が亡つて、北の方が残つてゐるが、此北の方が、千蔭の迷惑をかまはずに、しきりに交渉を生じようとする。千蔭は心すゝまぬながら、北の方の名譽をも思つて、適當にあつかつてゐる。忠こそは、忠経の姪にあたるあこ君に懸想するのだが、千蔭に力なく扱はれてゐる北の方は、忠こそに「氣色ある消息」を送る様になる。忠こそを父の千蔭の身代りにしようとするのだが、きつぱりと斷られて、これから忠こそを恨む様になり、奸計を用ゐて父子の間をさかうとするが、父の千蔭はなか／＼その計に陥らない。しまひに、父に對して横しまな計畫をたてゝゐると言ふ事を、まことしやかに人から聞かされて、千蔭がふと忠こそにその不満を洩らしたのがきつかけになつて、忠こそは出奔してしまふ。後に其事情が氷解して、千蔭は焦れ死してしまひ、北の方の方は零落して、これもさすらうてしまふ。

、此繼母子の話は、繼子いぢめの物語として簡略にしてみると、そのほいんとは、

(1) 繼子が男の子であること。

(2) 繼子いぢめの原因を、母の子に對するよこしまなる戀が遂げられなかつた事にしてゐること。

かう言ふ一つのたいふしてみると、室町以後の小説に出て来る「愛護若」の系統の話と同じ類型にはいる。淨瑠璃で有名になつた「攝州合邦辻」の、玉手御前と俊徳丸の話も、勿論此系統の物語である。

繼子が女である場合の繼子いぢめの話は、室町の小説や、特に「昔話」に到つて非常に發達してゐるが、男の子である場合とは、違つた道を通つたかの如く、趣きが變つてゐて、殊に目立つのは、繼母の腹をいためた子、本子と言ふべき者が對立して現れてゐる事だ。而も、本子は何の意志もない人間である事が多いのにも見ても、繼子本子の對立が、本來のものでない事が推測される。勿論後には本子が數名になつて、その中の末娘が繼子の同情者となつて來たり、一人の場合にも、本子が母親の意志に反して、繼子に同情的になつた

りしてゐる。併、さう言ふ風に發達して來たものでも、又、男の子の場合でも女の子の場合でも、共通して考へられる事は、繼子が何故憎まれなければならぬのかと言ふ點についての説明が納得出來ないと言ふ事である。殊に女の繼子は、初めから、いぢめられねばならぬ星の下に生れて來たと思はれない一生を送つてゐる。説明せられてゐる理由は、どうも我々の求めてゐる理由ではない。此は男の場合でもさうである。忠こそが出奔、流離の生活を送らねばならぬ理由として、物語自身が説いてゐるのは、やはり我々を満足させない。

殊に忠こそその話を惹く點は、北の方の奸計の部分に力がこめられてゐて、北の方つまり繼母の位置の人が、忠こそ懸想する前後は、物語自身曖昧であり、更に、繼子いぢめにとつては大事な要素と思はれる、繼子の流離譚が、殆ど脱落して了つてゐる。其點では、「愛護若」の方が、餘程古風をとめてゐて、繼子いぢめの物語の歴史は、逆流してゐると言つてよい。

繼子がいぢめられ、その結果として流離する事は、二段階に考へてみる方がよい。いぢめられる話は、根本にあるのは、年齢通過儀式的折の試練と、結婚の資格の有無の検査の爲の試練とである。此烈しい試練に堪へ得なければ、人は、一人前（成年）と認められなかつたし、結婚しうる資格があると、社會的に認容せられもしなかつたのである。譬へば古事記の大國主命の話もそれで、殆ど殺されて了ふ程の慘虐な目に會ふのだが、それに堪へられなければ、國を統治する一人前の者ともなれないのだし、素戔鳴尊の試練に堪へて初めて、その娘を與へられたのである。だから、いぢめられる話には、初めは幸福な交換條件があつて、それがあつた中は、決して慘虐でもなんでもなかつたのだが、どう言ふ譯か、幸福な交換條件を失つた爲に、いぢめる話の慘虐さだけが目につく様になつたのだ。

繼母と言ふ位置に立つ、いぢめる人間も、通過儀式の際の助成者を考へれば、或點説明がつくだらう。母代りの「まゝ」と言はれた役の者がつて、此の教育によつて、一人前に爲上げられて行くのだが、此「まゝ」が性格をかへて來て、現實的な感情のさゝくれだつた者になつて來ると、家庭生活の中の繼母と言ふ者になつて來るのである。

室町の小説類を見ると、純粹の繼子いぢめの話は少く、むしろ戀ひ物語であつて、その女主人公の姫君の境遇を説明する部分に、姫が繼子である事を説いてゐる、と言つた形のものが多い。謂はゞ、戀愛譚に、繼子いぢめの話が乗りかゝつて來てゐるのだが、やがて

その部分が人氣を得て、戀愛譚のからぬぎ捨て、しまつたとみるべきものが多い。だから純粹な繼子いぢめの話の多い「昔話」では、主人公の女の子の年齢もずつと低くなつて来る。これは、聞手の年齢の低下もさる事ながら、主題が、戀愛から離れて行つた事情考へに入れなければならぬ。それでも、ともするとその終結が、殿様が迎へに来たりしてゐるのは、やはり出生が忘れられずに残つてゐるのだとみてよいだらう。

此に對して、繼子が男の子で、繼母に戀ひをしかけられ、流離して行く話は、出生がいさゝか違ふ様である。傳説のもちうふとして違ふと見なければならぬ。

繼母と繼子との戀愛で、ごく早い話は、神武天皇の後、いすけより媛に、腹違ひの子、たぎしみゝの命が戀ひをしかける話が古事記にある。命は、その戀ひを遂げる爲に、媛の腹に出來た弟達を殺さうとし、逆に、弟によつて滅される。

もつとはつきりしてゐるのは、源氏物語の藤壺女御と光源氏との戀ひで、此戀愛は、繼母が繼子の子を生むと言ふ所にまで進んでゐる。源氏の君が、須磨に流適の生活を送らねばならなくなるのも、そこで天變地妖に遭遇するのも、結婚等級の亂れが神の怒りに觸れたのだと見るべきだらう。現在の源氏では、政治の過ちに對する天變の様に説かれてゐるが、作者も忘れてゐる根本に、それがあつたと見なければならぬであらう。

忠こそが**出奔し流離の生活を送り、忠經の北の方が零落して漂泊するものも、「愛護若」が流離して死に、繼母も死罪に行はれるものも、**やはり根本に、さうした亂れを許さぬ神の怒りがあつたと考へるべきであらう。

およそ馳け足で、日本の繼子いぢめの話の展望を終へたが、以上で、『忠こそ』の卷が、中篇として獨立性をもつたものである事、繼子いぢめの話としては、かなり進んだ時代に屬するものである事の説明はついた事しておく。

此卷の獨立性、他の卷々との關係のなさは、前に述べた「第四段を取り除いた『俊蔭』の卷」を思はせる程である。以下、宇津保全體と此卷との關係を見て行くのだが、

(1) 登場人物が他の卷と共通してゐること。

(2) 『俊蔭』の卷に此卷の話を匂はしてゐること。

(3) 俊蔭の持ち傳へた琴の話。  
と、この三點にまとめられる。

左大臣忠經の名も右大臣千蔭の名も、『藤原の君』『俊蔭』の兩卷に出て來てゐるが、其兩卷では、主流からはづれた人物で、格別の事はない。勿論、千蔭に忠こそと言ふ、すぐれた子息のある事は物語られてゐない。

『俊蔭』の卷には、兼雅が、年を隔て、仲忠母子に逢ひ、母子を京の邸に迎へようとする時に昔千蔭のおとよのたゞ一人子を繼母に謀られて、今は音にも聞えずとなむ言ふなる

と、兼雅が語る所がある。此は『忠こそ』の卷の内容を既に早くも——早くと言ふのは、普通の卷序で『忠こそ』が、『俊蔭』の次の次の卷だから言ふのだが——こゝで言つてゐるのか、即、『忠こそ』の卷は、『俊蔭』の卷の此部分を書かれた時、既に出來上つてゐた事になるのか、それとも『忠こそ』の卷のもととなつた中篇小説の事を言つてゐるのか問題になる。併、一層重要なのは、琴の話である。俊蔭が持ち傳へた十二の琴の琴の中、二つの琴の名が此卷に出來る。

その中、かたち風と言ふ名の琴は、源忠經が俊蔭から贈られたもので、その死後、北の方の財産となつてゐた譚だが、零落の後に、源雅頼に萬石で買つて貰つたと言ふ事が出てゐる。後に、あて宮がかたち風を弾く事が度々あるが、此時に、雅頼の家の財産となつたのだ。

をりめ風（おりめ風とも書かれてゐる）は橘千蔭が俊蔭から贈られたのだが、子の忠こそが愛用してゐた。忠こそ出奔の折、離れにくい事が二つあつた。一つは梅壺の君に物を申上げる事もなくなつてしまふこと、まう一つは、をりめ風を弾くことが出來なくなることであつた。それで忠こそは、をりめ風の龍角の所に、別れの歌を血をもつて書きつけておいた。後に事情を知つた千蔭は、歎きのあまり、此琴をこはして佛像を作らうとしたが、力を用ゐてもこはれる所か、傷もつかない。其中に大空がかき曇つて、雨降り雷鳴つて、琴を宙天高く巻き上げてしまつた。

此場合、梅壺のこゝをりめ風のことゝは、いかにも卒然と出て来る。梅壺のことは、『忠こそ』の巻で、遂にはつきりしない。はじめはあこ君と言ふ女の人との事が出て来るのだが、出奔の時にはあこ君の事がなく、をりめ風も、何か無理に忠こそに結びつけた様な感がしないでもない。梅壺のことはともかくとして、をりめ風の事は、宇津保としては意味ある結びつきである。

## 五、宇津保物語の改作 その一

清原俊蔭は、二十三年に及ぶ長い漂流の後に、漸く日本の國に歸つて来たが、其折に十二の琴を持ち歸つた。其漂流中俊蔭は、波斯國よりも更に遠い、佛菩薩や天人の常に行き通ふ所まで行き、阿修羅が切りこなす木を貰ひうけて、三十の琴を作り、天女を母として生れた七人の人々から、極樂淨土の樂の音に通ふ琴の手を、ことごとく弾きとつて来た。三十の中、殊に秀れた二つには、天女自ら、なん風・はし風の名を付け、此二つは人に聞かせてはいけない、此二つの音のする所へは、娑婆世界であらうとも必ず訪はうと約束する。残りの二十八の中、十の琴に、七人の天女の子達が、血を以つて名を書きつけた。ほかの白木の十八は、俊蔭は世話になつた七人の人々や、その他に贈り物にしてしまふ。少し宇津保自身の書き方が曖昧だが、多分作者は、命名された十二の琴を持ち歸つたと言ふつもりであらう。

天人達の話によると、俊蔭は、天の掟てによつて、天の下に琴によつて族を立つべき人であるとの事であり、又、天女を母とした七人の人々に當る人を、三代の孫に得るであらうと豫言される。俊蔭の血筋の者は、「琴の族」と呼ばれる宿命が、天の掟てによつて既にきまつてゐた。そして、かうした物語を中心とした、俊蔭漂流譚を以つて始まる宇津保物語は、琴の族の物語として展開して行く様な豫想を、讀者に抱かせる。

俊蔭は歸朝して、十二の琴をそれ／＼分配する。それは、琴の族が擴大して、宇津保物語が、恰も水滸傳の如く、八犬傳の如く、琴を持ち傳へた人々の物語として、展開して行くのか、と言ふ様な豫想をさへ、讀者にもたせるのである。

なん風・はし風の二つは、俊蔭はこれを一人娘に傳へる。人に見せてはいけぬ。幸ひあらば其幸ひのきはまる時、禍ひ極まる身ならばやはり其禍ひの頂上に、此琴をかき鳴らせと教訓する。此は俊蔭のその娘への遺言となつた。

俊蔭女は、仲忠と共に、山のうつばに隠れる時に、此琴を持つて行く。そして此山が東國から都に押しよせた兵士共に荒らされやうとした時、身の危険を感じた母子は、なん風を取り出して演奏する。山の木こぞりて倒れ、山さかさまに崩れて、立ち圍んだ兵士共は、忽に埋れてしまつた。

此なん風の音は、仲忠の實父、即、嘗て俊蔭女と一夜の契りを結んで、そのまゝ打絶えてしまつた、右大將藤原兼雅を、山のうつばにまで、導いて来る。此再會によつて、仲忠母子は兼雅に迎へとられ、以後順調な人生に踏み出すことになる(『俊蔭』)。

遙かに卷をへだて、最終卷の『樓上』の下卷で、仲忠が、其子犬宮に、三代に傳はる琴の手を教へ、いよ／＼樓の上より下りる時に、噂を聞いて、上皇を初め、當時の上流貴族が悉く集つて来る。言はゞ仲忠一家の名譽の頂上であるが、此時、はし風が演奏される。雷が騒しく鳴りひらめき、地震の様に大地がゆらぎ、俄に池の水がたゞへて溢れ出る、と言つた奇瑞が現れる。

なん風・はし風の記述も、細かい點では、多少、辻褄のあはない所もあるが、大體首尾一貫してゐる。(因に、琴の名の風は、「ふ」と訓んでゐる。『吹上』の卷の上に、やどもり、かぜとあるが誤りであらう。拾芥抄に記す琴の名器の中に、松風・南風云々とあるが、これを何と訓むか、拾芥抄自身では譯らない)。

二つの名器なん風はし風を除いた琴は、

- (1) りうかく風 俊蔭女のものとなり、仲忠に傳はり、娘の犬宮に傳はる(『藏開』上)。
- (2) ほそを風 俊蔭はまづ自分のものとし、俊蔭女、仲忠と傳はる。『吹上』の下卷、神泉苑の紅葉賀で、帝の手にこの琴があるのはおかしい。
- (3) やどもり風 俊蔭はこれを我家に残したが、仲忠は紀伊國吹上濱に、源涼<sup>ネン</sup>を訪問した折、涼に贈つた。以後消息なし。
- (4) せた風 嵯峨帝に贈る。兼雅が、うつばの仲忠母子を發見するに到る時、空にひびくなん風の音を聞いて、宮中にあるせた風と一

つ仲間ものだらうと想像する所がある。俊蔭の傳へた琴が、細かく使はれてゐる。

(5) やまもり風 嵯峨院の后宮に贈る。後に仲忠に降下した朱雀院の女一の宮が宮中で演奏する所があるから(『國讓』上)、此も宮中に傳はつた。

(6) はなぞの風 春宮、後の朱雀院に贈る。涼が後に宮中でひく事がある(『吹上』下)。

(7) みやこ風 春宮の女御、即、源雅頼の大君、仁壽殿の女御に贈る。しかし、後、噂を聞かない。

(8) かたち風 前述。雅頼の家に傳はつた此琴を、あて宮が、春日神社の社頭で演奏する。此琴の音が導きとなつて、出奔した忠こそが發見せられる。忠こそは雅頼と、昔の若かつた頃の物語をし、此時かいま見たことから、あて宮に思ひつく(『梅の花笠』)。琴の音のなかだちによつて舊知が再會する趣向は、兼雅と仲忠母子との再會の趣向と同じだが、神秘的な、琴の奇瑞を言はうとしてゐるのだから。女一の宮がやまもり風をひいた時、既に春宮の女御となつてゐたあて宮がこれをひいてゐるから、雅頼からあて宮に傳はり、あて宮は此を携へて、入内したのでらう。

(9) をりめ風 前述。

(10) あはれ風 名のみ見えて記述なし。

かう言ふ風に、宇津保物語から、琴の銘々傳とも言ふべきものを抜き書きして作つてみると、錯亂の多い宇津保としては、割合に前後の亂れが少い。勿論例によつて、せいひ・三千年・きりかぜと言つた様な、前後無關係の琴の名が卒然と出て來たりはするが、主要人物の名や年にさへ混亂のある宇津保のことだから、多少の事は寛恕しなくてはなるまい。

昔の物語のもつ一つの傾向として、家々に傳はる重器名寶に關する記述は、大事であつた。それが、其物語に對する讀者の信頼をかち得る、大事な條件となつてゐた。従つて、其記述は、正確さが要求されてゐた。それに關聯して、樂器の場合には、その演奏の技術の傳統についても、確かな書き方をしてゐる。平安朝の、少くとも其時代感の濃厚な時代の物語はさうであつた。たとへば源氏物語では、頭中將は、横笛の名人で、これがその子の柏木の右衛門督に傳はつて行く。この筋は源氏でも特に目立つてゐるが、宇津保の琴の



由來譚が、それ／＼筋道だつて書かれてゐる事は、重寶名器の由來譚の傳統と制約とを考へねばならぬだらう。前代の、物語のさう言ふ傾向、讀者のさうした嗜好は、次の代の重寶名器の奇瑞譚、神秘譚を生み出す素地となつた。近世の小説戯曲に、いやになる程出て来る「お家の重寶」の源流である。

右の銘々傳の形に整理したものでは看過せられ易いが、琴が、宇津保の物語的展開のきっかけに活用されてゐる例がいくつもある事と、更に、あて宮の懸想人として大事な人々で、而も本來のあて宮ものがたりの人々でない人（つまり『藤原の君』の巻の懸想人でない人々）は、殆ど、俊蔭の琴に關係があると言ふ事である。たとへば、『藤原の君』の巻を首巻として、現在の宇津保を假に整へてみると、

第一卷 藤原の君（あて宮の出生）

第二卷 俊蔭 嵯峨院（俊蔭の琴の一つを傳へた仲忠と言ふ懸想人の物語）

第三卷 忠こそ 梅の花笠（俊蔭の琴の一つを傳へた忠こそあて宮との物語）

第四卷 吹上 上下（俊蔭の琴の一つを傳へた源涼とあて宮との物語）

こんな風な整理も出来るのである。そして或時期の改作者には、こんな計畫があつて其意圖のもとに宇津保をまとめようとしたのかもしれないとさへ思はせる。

事實、前に述べた様に、俊蔭漂流譚をぶろろおくとする宇津保は、十二の琴を持ち傳へた人々にまつはる物語として展開して行きさうに見えるのだが、その計畫が作者にあつた事を充分に見せながら、源氏の三分の二に及ぶ長篇宇津保の、その八犬傳式水滸傳式計畫は、失敗もしくは未發に終つてゐる。

はるかに時をへだて、江戸の淨瑠璃、假名手木忠臣藏も、水滸傳式趣向をたて、其大序に、「落ち散つたる兜の数は四十七」と言ひ、此から展開する忠臣の物語が、其兜の一つ／＼を得た人々の物語だとして、赤穂浪士の銘々傳を書かうとしてゐる計畫を見せてゐるが、大序の作者の計畫はみごとに裏切られた進展をして行つてしまふ。

そして、宇津保も忠臣蔵も果し得なかつた計畫は、漸く馬琴が八犬傳でしとげた。馬琴は多分宇津保の趣向は知らず、多分忠臣蔵のひんとよつて、八犬傳の趣向を水滸傳によつて立てた。だから水滸傳式趣向と言ふ點では、馬琴は忠臣蔵の作者の前に脱帽しなければならぬし、更に水滸傳の作者も、宇津保を通して、多分宇津保の作者がかうした趣向を借りようとした先行文藝——多分それは中國文學であらうが——に、敬意を拂はねばならぬだらう。

宇津保物語に出て来る「琴の族」と言ふ語は、『藏開』の上にこの琴の族ある所、聲する所には……

とあり、俊蔭の流れの人々を斥してゐる様だが、私はこれをやゝ廣く、俊蔭傳來の琴を傳へた人々をこめてさう言つてゐる。

忠こそと言ふ、先行する中篇小説の主人公は、本來宇津保と關係はなかつたが、宇津保の何番目の改作者の手によつて、宇津保の中に抱合せられた。そしてその結びつき方は、俊蔭の傳へた十二の琴の中の一つと忠こそとを結びつけ、即、琴の族の一人としての資格を忠こそに與へ、それによつて、宇津保の登場人物として來たのである。長篇宇津保物語の一卷として、甚だすはりの悪い『忠こそ』の巻も、かう考へて、初めてその所を得る事になるだらう。

## 六、宇津保物語の改作 その二

仲忠と涼とは、琴の族の物語として考へると、共に同じく俊蔭の琴を傳へた人物であるが、現在の物語の中に溶けこんでゐて、對立もしくは並立する人物として目立つてゐない。しかし、先行する中篇小説では、その存在はかなり並立的であつた様だ。

御前に人々多く集ひゐて、物語の良し悪しき、にくき所などを定め言ひしろひ、涼、仲忠がことなど、御前にも劣り勝りたる事など仰せられける——枕草子

圓融院の御時にや、宇津保の涼仲忠といづれ勝れると論じけるに、しのはらは涼が方にやありけむ、女一の宮は仲忠が方に在しける

にや、いづれをいゝなどあるに、ものな言ひそと仰せられければ、ともかくも言はで在しけるを、言ひおこせ給うければ  
沖つ波 吹上の濱に家居して、一人すゞしと思ふべしやは——公任卿集

此等によつてみると、二人が、其優劣を論ぜられる様な立場にある中篇小説が、早くあつた事が想像出来る。

現在の宇津保物語を讀んで行けば、仲忠は絶待に他の追隨を許さぬ程に、ぬけ出てゐる人物として書かれて行かねばならぬ筈である。それでなければ、俊蔭の漂流譚の効果もうすれて了ふし、天人の三代の孫たるべき仲忠が、外の人とひとしなみに扱はれては、讀者の期待にそむくと言ふものだ。それが卷の進むに伴れて、あて宮の懸想人としては、意外に低い位置しかあたへられてゐない。殊に『吹上』の卷では、涼が非常に讚美せられてゐて、琴の演奏なども、簡単に、三代の孫たる仲忠と等しいのである。こんな點からも、涼仲忠並立を主題とする中篇小説の先行するものが考へられるし、更に、仲忠と言ふ名の、古い小説中の人物が、後に、俊蔭の孫にかさなつて行つたのではないかとさへ思はせられるのである。

吹上の物語では、しては涼、わきは仲頼であつて、涼の事を耳にするのも、涼訪問の計畫を立てるのも仲頼であつて、仲忠は此場合ごく軽い人物である。尤、二人とも、あて宮の懸想人としては仲よく落選するので、中篇小説における二人は、懸想人としてのらいばるでなく、當代の秀れた人物として並稱せられてゐたのであらう。

そして現在の宇津保物語に於ける、小説的な對立は、却つて遡つて、その父達、仲忠の父の兼雅と、あて宮の父の雅頼との對立にある。枕草子や公任集の筆者達が、現在の宇津保を手にとつて、對立する人物の月且を行ふなら、むしろ雅頼兼雅の對立をとり上げるべきで、全體の中にとけこんで、その對立の、特に際立つてゐない、仲忠・涼を、特に取出して來るのは、をかしいと言はねばならぬ。

藤原兼雅は、宇津保では、太政大臣の四男で、後に左大臣となるが、物語への登場は、非常にふしぎな出方デカウをしてゐる。二回でびゆりする。

『俊蔭』の卷では、初め、

……又十五才ばかりにて、玉光り輝くうなる子の、御馬添へ多くて、渡り給ふ。うなる子はこの（太政）大臣殿の御四郎にあたり給

ふ。……若小君となむ聞えける。

此若小君が俊蔭の娘と契りを結び、中絶えて後、うつほの母子が、なん風をかき鳴した日に、

其日、帝、北野に御幸し給ふ日にて、……其日候ひ給ふ右大將のおとゞ、御馬を引廻して此琴の調べを聞きつけ給ひて、御兄の右大臣に聞え給ふ。……右のおとゞ……と聞え給へば、大將「仙人などもかくこそおはすなれ。さらば兼雅一人まからむかし」

とあり、讀者はまだ此右大將が嘗ての若小君とは知らないが、兼雅と言ふ固有名詞が、右の如く、自稱として初めて出る。ついで、兄の大臣は……昔父母の賀茂詣での時、騒ぎ宣ひしを思し出でて……

かう言ふ不完全な紹介のしかたで、讀者は、若小君がいこうる右大將兼雅であると言ふ事を知らされる。誰やらが見かねて書き添へた注らしい文句が、本文になつてゐる。

昔若小君と聞えしは大將、兵衛佐におはせしは右大臣になむおはする。

所が『藤原の君』の卷になると、

かくて又、右大將藤原兼雅と申す、年三十ばかりにて、世の中に心にくく、覺え給へる、限りなき色好みにて、廣き家に、多く屋共建て、よき人々の女、方々に住ませて住み給ふありけり。

と、かくの如く、『俊蔭』の卷の、俊蔭の女の夫であり、仲忠の父であると言ふ事は、全く關係なしに、新しく登場して来る。『藤原の君』の卷には、俊蔭・俊蔭女・仲忠と言ふ三代の人々の事は、けぶりも出てゐないのであつて、主人公級の人物の、かう言ふ無責任な出し方は、誰しも疑問を感じないではゐないだらう。

源雅頼も、宇津保では、一世の源氏であつて、童名を藤原の君と言つた事は、前に述べた。此「藤原の君」は、源氏に出て来る。が勿論、雅頼と言ふ名は出て來ない。又、宇津保の本文も、此藤原の君が、即、源雅頼であることは、不確實な書き方をしてゐる。此も本稿の「二」に述べた。

これに對して、譬へば仲忠は、紹介が正確であつて、生れて以來、子と呼んでゐて、さて、

十六と言ふ年、二月にかうぶりせさせ給ひて、名をば仲忠と言ふ。

と、正式な紹介をしてゐる。兩者の間のこれだけの違ひも、雅頼兼雅兩名ともに史上の人物であるとなると、結びつけ方の不手際が、かうした人名の出し方の不自然さとなつて現れたのだと見る事が出来よう。

史上の人物としての素描を、公卿補任によつて試みると、

(1) 藤原忠雅は、父は權中納言忠宗、母は參議家保卿女。忠宗の祖父は、道長の孫師實である。近衛天皇の康治元年十九歳で從三位非參議となり、保元平治の亂の折に廟堂にあつた人で、六條天皇の仁安三年、四十五歳で從一位太政大臣となり、翌々年、上表して辭退、平家滅亡の後、後鳥羽天皇の文治元年、出家してゐる。宇津保の忠雅は、表面には立たないが、物語でも、最後の方で、同じ太政大臣となつてゐる。

(2) 藤原兼雅は、史上の人物としては、忠雅の子で、物語の方で、忠雅の弟となつてゐる點は違つてゐるが、左大臣となつた事は、公卿補任も宇津保も同じだ。母は中納言家成卿女。二條天皇の永萬元年、從三位非參議となつた。時に十八歳。安徳天皇の壽永二年、正二位權大納言であつたが(三十六歳、義仲の亂の折、出仕をとゞめられてゐる。おそらく木曾義仲專横の人事であらう。後鳥羽天皇の文治三年、四十歳で正二位權大納言に還任し、五十一歳で左大臣となり、翌正治元年、土御門の時、左大臣を辭した。此あと、兼雅の次に左大臣となつたのが、新古今で有名な藤原良經であつた。

(3) 源雅頼は、宇津保では兼雅に對立し、官も常に一級先じてゐるが、史上の人物はいさゝか違ふ。父は入道中納言雅兼。村上源氏の流れで、祖父顯房は右大臣、曾祖父師房(村上の孫、具平親王の子)は太政大臣をつとめた人である。母は權大納言能俊卿女。兼雅が十八歳で非參議となつた時は、雅頼は既に三十九歳で、正四位下參議であつた。兼雅二十一歳の折には、雅頼を越して權中納言となり、雅頼は、おかれて翌年權中納言となつた。以後六年間、共に權中納言にとゞまつてゐた。高倉天皇の治承三年には、雅頼は正三位權中納言の官を辭してゐる。

私の乏しい知識では、以上の三人の名を、平家物語で知つてゐるだけである。松下氏の論文によると、史上の雅頼兼雅も、勢威を爭

つたと言ふのだが、それは、公卿補任以外の史書によらねばならず、今の私のよくする所ではない。しかし此線に沿うて調査をすゝめて行けば、物語の宇津保が、どこまで史實をうつしてゐるかを、やがては明らかにする筈だ。又、何故に特に、此等の人々を、びつこくあつぷして来たかの事情も、まう少しわかかつて来るだらう。

## 七、餘 論

主として宇津保の現状の様々の矛盾を考察して、此以前にあるべき中篇小説を考へ、今日の宇津保への、幾多の作者の参加を、大膽に推測した。尙いくつかの書きのこしを順序なくあげておく。

(1) 松下氏の論文では、なほもつと多くの人々の類似をあげてをられるが、此もまう少し徹底した調査を進めてからにしたい。

(2) あて宮ものがたりの一人物たる源實忠に就いて、宇津保の實忠が中納言で、妻は三條に邸があつて、三條の上と呼ばれてゐるのに對して、松下氏によると、後醍醐天皇の時の人に、三條中納言實忠と言ふ人がゐると言ふ。此ももし暗合でなくば、南北朝以後の筆さへも加つてゐる事になる。

本稿では實忠の事を書かなかつた。實忠は『藤原の君』の巻に登場するあて宮の十一人の懸想人の第一號で、珍しく最後まで琴の族に無關係であつて、しかも最後まで物語中に出没する。注意すべき人物である。

(3) 實忠・兼雅と、もう一人源仲澄とが、その十一人中で注意すべき人で、兼雅は、あて宮ものがたりの側から、いつか仲忠ものがたりの側に轉身し、仲澄は同腹の妹であるあて宮に懸想して、焦れ死にしまふ。仲澄のことは、狭衣物語や石清水物語に出て来るが、さうした物語も、成立年代がくだるから、それによつて先行中篇小説は考へられぬ。松下氏は仲澄をも、實在人物の名に關係づけてをられるが、すると、『藤原の君』に登場して、而も十一人中、最も大事な三人が三人とも、後代の實在人物によつてゐることになり、誠に興味をひく。

(4) 雅頼が自分の邸に、娘の婿達を集めて分散しないのは、平安朝の結婚生活の定型からみると、此は異様で、武家の生活を思はせる。  
(5) 俊蔭の話にも、仲忠の話にも、孝の徳に關する意識的な記述があり、言はゞ、孝の唱導意識と言つたものが考へられる。これも後代風である。

(6) 源氏物語が、既に現實の藤氏全盛に對して王氏の榮華の物語である。宇津保も、史上では、雅頼の官位は低く、忠雅兼雅に及ばぬが、物語では、朱雀院の次の今上は、母は、雅頼の宮腹の大君たる仁壽殿女御の御子であり、春宮は、母は、これも王氏で、あて宮である。やはり物語は、王氏出の帝が續き、雅頼の榮華のきはみとなつてゐる。

(7) あて宮は、母は嵯峨院の女一の宮であるから、自らは孫王である。又、仲忠の子の犬宮も、仲忠と朱雀院の女一の宮との間の子だから、これも孫王である。源氏物語は、先行する紫の物語を考へると、藤壺が女源氏であり、若き藤壺とも言ふべき紫の上も、女源氏である。従つて源氏物語は、光源氏物語の外に、女源氏物語が考へられる。此に對して、宇津保は、いはゞ女孫王の物語である。俊蔭女も孫王、梨壺の女御(兼雅の子)も孫王である。即、宇津保の女の側の主要人物は、すべて孫王で、従つて、小説上の血縁や物語の筋立てを無視してかゝれば、境遇は共通してゐる。これは先に述べた、あて宮犬宮が宮と呼ばれる事と共に重要な課題である。

折口先生には、早く「新編源氏物語」の御計畫がある。横筋と思はれるものや、後の書き繼ぎと思はれる部分を削らうと言ふ趣旨である。十五年前、卒業論文に宇津保を選んだ時「新編宇津保物語」を考へてみては、とのお勧めをうけた。私の宇津保論は、「新編宇津保物語」編纂の爲の、基礎となるべき考察に出發したのである。其考察論が、いまだに此あたりをうろついてゐる事は、先生に對して恥かしいが、しかたがない。